2009年
5月7日
木曜日

ウルトラマンの「正義」を越えて

上村敏之　教授（財政学）

幼少の頃、ウルトラマンをテレビで見るのが好きだった。何故だか分からないが、毎週のように宇宙から怪獣がやってきて、街を破壊するのである。その街がいつも日本だったことや、あれだけ毎週破壊されたら経済がガタガタになるだろうということは、子どもの私にはどうでも良かった。とにかく、カラータイマーが点滅してからスペシウム光線で怪獣を倒す「ウルトラマンは正義の味方」なのであった。

大人になって、「正義」とは何かについて考えることが多くなった。それは、私の専門が財政学であり、税制や社会保障制度によって所得の再分配に興味があるからである。「正義」が何なのかを考えなければ、どのように財政制度を整備するべきかを提示できない。

「正義」とは何だろうか。まず、「ウルトラマンは正義の味方」というときの「正義」について考えたい。ウルトラマンが「正義」ならば、怪獣は「悪」である。常に「正義」は「悪」に打ち勝つ。「正義」は栄えるが、「悪」は廃れる。

このような考え方で「正義」をとらえるのは、ウルトラマンに限ったことではない。アメリカのヒーロー、スーパーマンだってそうだ。水戸黄門もヤッターマンも、「悪」があるからこそ「正義」が輝く。「悪」がなければ「正義」も存在しない。

「正義」の前提が「悪」という「正義」も、ひとつの「正義」のあり方である。しかし、「悪」は絶対的に「悪」なのだろうか。街を破壊する怪獣も、何か理由があって地球に来たのかもしれない。怪獣に一方的に街を破壊される地球人は、味方をしてくれるウルトラマンを「正義」としてとらえるだけなのかもしれない。

宇宙からの怪獣も、街を破壊するように見えても、ひょっとすると地球に助けを求めにきて、うまく表現ができないままに、街を破壊してしまったのかもしれない。ウルトラマンの物語をよく見ていると、たびたび悲しい運命を背負った怪獣が登場する。そういう怪獣が登場するとき、子どもだった私は、怪獣にも同情を寄せるのであった。

つまり、「正義」は相対的な概念であり、絶対ではない。よく考えてみると、怪獣との戦闘シーンで、ウルトラマンも街を破壊している。怪獣を倒すためとはいえ、ウルトラマンに家を破壊された人は、「ウルトラマンは正義の味方」と思えるだろうか。たとえば、アラブ諸国の「正義」は、イスラエルの「正義」と同じではないだろう。どちらの立場に立つかによって、「正義」はまったくことなる様相で現れるのである。

したがって、この概念で「正義」をとらえることは、あまり意味がない。やたらに官僚をたたき、他の政党の失敗を責め立てることで、「正義」を連呼する政治家に、むなしさを感じるのは、私だけだろうか。

もっと建設的に「正義」をとらえなおすことが必要だろう。多様な人々が自らの能力を伸ばし、その能力を十分に発揮することができる、自由で公正な社会の実現こそ、本当の『正義』である。果たして、いまの日本にそのような『正義』はあるのだろうか。私たちは、ウルトラマンの「正義」を越えなければならないのである。■